

## 1.はじめに

物体と物体が接近あるいは接触する場合には、スピードまたは接近・接触している時間の長さは、場合によってまちまちである。その動作を表わす動詞を考えると、「さわる」と「ふれる」の二語を考へることが出来る。さらに、「接する」と「接触する」の二語も考へられる。動詞の意味分析を行なうにあたっては、類義語の設定が問題となる。国立国語研究所編の『動詞の意味・用法の記述的研究』(1972)によると、「(165)さわる/ふれる/あたる,ぶつかる」「(166)さわる,ふれる/あてる/ぶつける/たたきつける」という語群を設定して分析している。この小論文では、あえて、その例にしたがわず、「さわる・ふれる・接する・接触する」の四語を類義語と設定した。その第一の理由は、国立国語研究所編の『分類語彙表』(1964)によると、「2.156.接近・接触」の項に、「\*触れル \*さわリル \*接シヨル」と記述されているからである。第二の理由は、この四語は、物体と物体の接近あるいは接触という動作を表わすことに一応の共通点を見いだせるからである。この共通点が、この四語の最も基本的な性格であると考えられる。しかし、この四語は、全く同じ意味領域を有しているわけではない。その差異を例文をもとにして考察することにする。分析の中心となるのは、「さわる・ふれる」の二語である。

## 2.分析

## 2.1. 主体と客体

「さわる・ふれる・接する・接触する」の四語は、主体と客体

が、接近あるいは接触を表わす動詞である。主体と客体をとりうるものは、人間(人体)と物体である。厳密には、太郎・花子といった人間と手・顔といった人体を区別するのが望ましいが、それをやめ、人間と人体をまとめた形式で処理することにする。

### 2.1.1. 主体、客体とも人間(人体)の場合。

- (1) 彼女は、彼の肩に さわった。
- (2) 彼女は、彼の肩に ふれた。
- (3)\* 彼女は、彼の肩に 接した。
- (4)\* 彼女は、彼の肩に 接触した。
- (5) 検温のために 太郎は、花子の額に さわった。
- (6) 検温のために 太郎は、花子の額に ふれた。
- (7)\* 検温のために 太郎は、花子の額に 接した。
- (8)\* 検温のために 太郎は、花子の額に 接触した。

主体・客体とも人間(人体)の場合には、「さわる」と「ふれる」の二語が使える。

### 2.1.2. 主体が人間(人体)、客体が固体の場合。

- (9) 彼は、手で 机に さわる。
- (10) 彼は、手で 机に ふれる。
- (11)\* 彼は、手で 机に 接する。
- (12)\* 彼は、手で 机に 接触する。
- (13) 作品に さわらないでください。
- (14) 作品に ふれないでください。
- (15)\* 作品に 接しないでください。
- (16)\* 作品に 接触しないでください。

主体が人間(人体)、客体が固体の場合には、「さわる」と「ふれる」の二語が使える。

2.1.3. 主体が人間(人体)、客体が液体の場合。

(17) 登山者は、谷川の水にさわった。

(18) 登山者は、谷川の水にふれた。

(19)\* 登山者は、谷川の水に接した。

(20)\* 登山者は、谷川の水に接触した。

(21) 明は、手で水にさわる。

(22) 明は、手で水にふれる。

(23)\* 明は、手で水に接する。

(24)\* 明は、手で水に接触する。

主体が人間(人体)、客体が液体の場合には、「さわる」と「ふれる」の二語が使える。

2.1.4. 主体が人間(人体)、客体が気体の場合。

(25)\* 洋子は、深山の空気にさわった。

(26) 洋子は、深山の空気にふれた。

(27) 洋子は、深山の空気に接した。

(28)\* 洋子は、深山の空気に接触した。

主体が人間(人体)、客体が気体の場合には、「ふれる」と「接する」の二語が使える。「ふれる」と「接する」は、「その場の空気にふれる/接する」とか「町のふん囲気にふれる/接する」というような、気体との関係が連想されるものにも使える。

2.1.5. 主体が人間(人体)、客体が目に見えない物の場合。

(29)\* 太郎は、三千ボルトの電流にさわって即死した。

(30) 太郎は、三千ボルトの電流にふれて即死した。

(31)\* 太郎は、三千ボルトの電流に接して即死した。

(32)\* 太郎は、三千ボルトの電流に接触して即死した。

主体が人間(人体)、客体が目に見えない物の場合には、「ふれる」が使える。(29)~(32)の例文は、自殺のために故意に、また不注意

に高圧線に、人体の一部が接触して、人体に電流が流れて、感電死した状態を考えていただきたい。

以上、主体が人間(人体)の場合について考察してきた。「さわる」は、客体が気体と目に見えないものの場合には、使えないようである。「ふれる」は、客体に拘束されずに使え、使用範囲が広いようである。「接する」は、客体が気体の場合のみ使えるようである。「接触する」は、使えないようだ。

次に、主体が人間以外の動物の場合には、どうであろうか。動物と一口にいっても、数えきれないほどの種類がある。それらすべてにわたって考察することは、不可能である。そこで、身近な動物であるネコを中心にして考察してゆきたい。人間が、動物の動作を観察して記述するさい、動物を人間と対等なものではなく、下に見る傾向があり、また動物の動作を擬人化して、とらえる傾向があるという点に注意しなくてはならないと考える。

2.1.6. 主体、客体とも動物の場合。

(33) 子ネコが、親ネコに さわる。

(34)\* 子ネコが、親ネコに ふれる。

(35)? 子ネコが、親ネコに 接する。

(36)\* 子ネコが、親ネコに 接触する。

主体、客体とも動物の場合には、「さわる」が使える。しかし、「接する」については、使えるとも使えないとも言えない。

2.1.7. 主体が動物、客体が団体の場合。

(37) ネコが、みかん箱に さわっている。

(38)\* ネコが、みかん箱に ふれている。

(39)\* ネコが、みかん箱に 接している。

(40)\* ネコが、みかん箱に 接触している。

主体が動物、客体が団体の場合には、「さわる」だけが使える。

2.1.8. 主体が動物、客体が液体の場合。

(41) ネコが 木に さわっている。

(42) ? ネコが 水に ふれている。

(43) \* ネコが 水に 接している。

(44) \* ネコが 水に 接触している。

主体が動物、客体が液体の場合は、「さわ」だけが使える。「ふれる」は、人間(人体)が主体の場合と同じく使えるそうだが、はっきりしない。

2.1.9. 主体が動物、客体が気体の場合。

(45) ? ネコが 冷たい空気に さわっている。

(46) ? ネコが 冷たい空気に ふれている。

(47) ? ネコが 冷たい空気に 接している。

(48) \* ネコが 冷たい空気に 接触している。

主体が動物、客体が気体の場合は、「接触する」は使えないが、「さわ」-「ふれる」-「接する」の三語は、使えるかどうかは、はっきりしない。

2.1.10. 主体が動物、客体が目に見えない物の場合。

(49) ? ネコが 百ボルトの電流に さわって 感電した。

(50) ネコが 百ボルトの電流に ふれて 感電した。

(51) \* ネコが 百ボルトの電流に 接して 感電した。

(52) \* ネコが 百ボルトの電流に 接触して 感電した。

主体が動物、客体が目に見えない物の場合は、「ふれる」が使えるようだ。「さわ」は、使えるかどうかは、はっきりしない。

以上、主体が動物の場合について考察してきた。しかし、あまりにもあいまいな部分が多かった。主体が人間(人体)の場合と、ある程度共通点が見いだせた。「さわ」の使える範囲が、主体が人間(人体)の場合と動物の場合において、ほぼ重なる。

「触る」、「接触する」も同じ傾向があるようだ。「ふれる」について  
は、主体が人間(人体)の場合と一致する部分があるが、客体が目に見えない物の場合しかなかった。

2.1.1.から2.1.10.まで主体が生物である人間(人体)あるいは動物について考察してきたが、次に主体が固体の場合について考察してみよう。

2.1.11. 主体が固体、客体が人間(人体)の場合。

(53) コンクリートの壁が、少女の背中に さわった。

(54) コンクリートの壁が、少女の背中に ふれた。

(55)\* コンクリートの壁が、少女の背中に 接した。

(56) コンクリートの壁が、少女の背中に 接触した。

主体が固体、客体が人間(人体)の場合は、「さわる」、「ふれる」、「接触する」の三語が使える。

2.1.12. 主体が固体、客体も固体の場合。

(57)\* 机が、木箱に さわっている。

(58) 机が、木箱に ふれている。

(59) 机が、木箱に 接している。

(60) 机が、木箱に 接触している。

主体が固体、客体も固体の場合は、「ふれる」、「接する」、「接触する」の三語が使える。

2.1.13. 主体が固体、客体が液体の場合。

(61)\* リトマス紙は、酸性溶液に さわると 変色する。

(62) リトマス紙は、酸性溶液に ふれると 変色する。

(63)\* リトマス紙は、酸性溶液に 接すると 変色する。

(64)? リトマス紙は、酸性溶液に 接触すると 変色する。

主体が固体、客体が液体の場合は、「ふれる」が使える。「接触する」は、使えそうだが、はっきりしない。

2.1.14. 主体が固体、客体が気体の場合。

(65)\* 金属は、空気にさわると酸化する。

(66) 金属は、空気にふれると酸化する。

(67)? 金属は、空気に接すると酸化する。

(68)\* 金属は、空気に接触すると酸化する。

主体が固体、客体が気体の場合は、「ふれる」が使える。「接する」は、使えそうだが、は、きりしない。

2.1.15. 主体が固体、客体が目に見えなかつたり、物体でないものの場合。

(69)\* 写真のネガが、光にさわる。

(70) 写真のネガが、光にふれる。

(71)\* 写真のネガが、光に接する。

(72)\* 写真のネガが、光に接触する。

主体が固体、客体が目に見えなかつたり、物体でないものの場合には、「ふれる」だけが使える。

以上、主体が固体の場合について考察してきた。「さわる」は、客体が人間(人体)の場合だけに使えるようだ。「ふれる」は、客体のすべてにわたって使えるようだ。「接する」、「接触する」の二語はあいまいなところがある。2.1.12. の主体が固体、客体も固体の場合「さわる」は、使えなかつたが、徳川宗賢・宮島達夫編『類義語辞典』に、

(73) 木の枝が、窓にさわっている。

という例文があり、この例文における「木の枝」は、固体ではなく、人体と考えていると説明がある。擬人的用法といえる。

また(74) 鉛筆で時計にさわる。

(75) たもとが、いすにさわる。

(76) はしで、ごちそうにさわる。

といった表現が可能である。固体でも、人体の延長と考えら

れるものには、「さわる」が使えるようである。

次に、主体が気体である場合について考察してみよう。

2.1.16. 主体が気体、客体が人間(人体)の場合。

(77)<sup>x</sup> 彼の息が、彼女の頬に さわった。

(78) 彼の息が、彼女の頬に ふれた。

(79)<sup>x</sup> 彼の息が、彼女の頬に 接した。

(80)<sup>x</sup> 彼の息が、彼女の頬に 接触した。

主体が気体、客体が人間(人体)の場合は、「ふれる」だけが使える。

2.1.17. 主体が気体、客体が固体の場合。

(81)<sup>x</sup> 水蒸気が、ガラスに さわって 水滴となる。

(82) 水蒸気が、ガラスに ふれて 水滴となる。

(83)<sup>x</sup> 水蒸気が、ガラスに 接して 水滴となる。

(84) 水蒸気が、ガラスに 接触して 水滴となる。

主体が気体、客体が固体の場合は、「さわる」と「接触する」の二語が使える。

2.1.18. 主体が気体、客体が液体の場合。

(85)<sup>x</sup> 冷気が、海面に さわって きりが発生する。

(86)<sup>?</sup> 冷気が、海面に ふれて きりが発生する。

(87)<sup>?</sup> 冷気が、海面に 接して きりが発生する。

(88) 冷気が、海面に 接触して きりが発生する。

主体が気体、客体が液体の場合は、「接触する」だけが使える。

「ふれる」と「接する」の二語は、使えるような気がするが、はきりしない。

2.1.19. 主体が気体、客体も気体の場合。

(89)<sup>x</sup> この気体は、水素に さわると 爆発する。

(90) この気体は、水素に ふれると 爆発する。

(91)\* この気体は、水素に接すると爆発する。

(92)\* この気体は、水素に接触すると爆発する。

主体が気体、客体も気体の場合は、「ふれる」だけが使える。

以上、主体が気体の場合について考察してきた。「さわる」は、  
客体がなんであっても使えない。「ふれる」は、客体が液体の  
とき、はっきりしないが、他の場合は使えるようだ。「接する」は  
客体が液体の場合は、あいまいであるが、他の場合は使えない。  
「接触する」は、客体が固体と液体の場合に使えるようだ。

2.1.1.~2.1.9.についてまとめてみることにする。「ふれる」は、  
全体を通して使用範囲が広い。以下「さわる」、「接触する」、「接す  
る」の順である。主体が人体である場合は、「さわる」も「ふれる」も  
ほとんど同じように使うことができる。「さわる」が使えるのは、  
主体あるいは客体のどちらか一方または両方が、人体である  
場合に限らんでいるようだ。「接する」、「接触する」の二語は、あ  
いまいなところが多い。

「さわる」……人間(人体)に焦点。

「ふれる」……物理的・客観的。

「接する」……不明

「接触する」……固体に焦点。人間(人体)も固体と見なされる。

## 2.2. 方法(人体の部位による接触の方法の考察)

ここでは、人体の部位に関しての考察なので、考察の対象  
となる語は、「さわる」と「ふれる」の二語である。

(13) 作品に さわらないでください。

(14) 作品に ふれないでください。

この場合は、作品に(手で)さわる/ふれると考えることができ  
る。

(93) 彼は、その絵に 肩で さわった。

(94) 彼は、その絵に 肩で ふれた。

(93)・(94)の例文は、両方とも成り立つ。しかし、「肩でさわるといふ表現は何かぎこちなく、しっくりしない。小学館発行の『日本国語大辞典』によると、「さわると手で触れる」と記述されている。これによると、「さわると手でふれる」ということになる。主体が人間(人体)の場合、「で格について考えてみると、「手で」とか「足で」とか、人体の各部位の名称を「で格はとることができる。

(95) 太郎は、足で机にさわった。

(96) 太郎は、足で机にふれた。

(95)・(96)の例文については、何ら異和感がない。とすると、「さわるとは、一概に「手でふれる」とは、言えないのではないかという疑問がおこる。しかし、(13)・(14)の例文からわかるように、「手でさわるとあえて記述しなくても、手による接触だと容易に判断がつくと思われることから、「さわるといふ行為は、手による接触を人体の他の部位より、より強く表わす傾向があるようだ。

### 2.3. 動作

「さわるとふれる・接する・接触する」という語について、この四語のあらわしうる動作を物理的にとらえて考察してみることとする。

#### 2.3.1. 速度

(97) 太郎は、花子の肩にすばやくさわった。

(98) 太郎は、花子の肩にすばやくふれた。

(97)・(98)の例文は、両方とも使える。しかし、全く同じ印象をうけるわけではない。「すばやくふれた」の方が不自然な気がする。これだけでは、結論をひきだしにくい。が、「さわると方が「ふれる」より、相対的に速度感、つまり接触のスピードがあるように思える。

### 2.3.2. 時間性と意志性と接触面

(99) 彼の唇は、ほんの一瞬間 彼女の肩に さわった。

(100) 彼の唇は、ほんの一瞬間 彼女の肩に ふれた。

(99)・(100)の例文は、両方とも使える。しかし、「さわる」の方が不自然な気がする。

(101) この服は、肌ざわりがよい。

(102) この服は、手ざわりが悪い。

「肌ざわり」、「手ざわり」という言葉はあるが、「肌ぶれ」、「手ぶれ」という言葉はない。感触は、たしかに、少し接触しただけでもわかるかもしれない。しかし、接触の時間が長いほど、より確実なものになるはずである。「肌ざわり」、「手ざわり」といったものも、接触時間が長いほど、より確実になる。「肌ぶれ」、「手ぶれ」という言葉がないことから関係すると思うが、「さわる」のほうが、「ぶれる」より、接触時間が持続的であるようだ。そして、接触面も広いと思われる。派生的用法であるが、「さわらう」と「ぶれあう」という表現がある。「さわらう」というのは、互いにさわらう意味があり、「ぶれあう」というのは、相手とほんの少しだが心の交流ができたという意味がある。これも「さわる」の方が、「ぶれる」より接触時間がより持続的であるということを表しているように思える。

(103) 太郎は、花子の尻に わざと さわった。

(104) 太郎は、花子の尻に わざと ふれた。

(103)・(104)の例文は、両方とも使える。しかし、「わざとふれた」の方が不自然である。「わざとさわった」の方が、より真実性が感じられる。「さわる」の方に、意志性があるように思える。

(105) 太郎は、花子に ふれたふりをして さわった。

(106)\* 太郎は、花子に さわるふりをして ふれた。

(105)・(106)を比べてみると、明らかに、「さわる」には、意志性があることがわかる。しかし、「ぶれる」に、全く意志性がないかと

いさうそふではなく、ある場合も考えられる。「さわる」の方が意志性が、「ふれる」より強い傾向があるようだ。「さわる」は2.2.で考察したように、手による接触を強く示す傾向があるために、より強い意志性があるのかもしれない。

次に「接する」について考察してみる。

(107) その家は、往来に接してたてである。

(108) 戸に直ぐ接してはしごがある。

「接する」という語は、接触という動作より、接触あるいは、ある距離をおいて接近したまま、静止した安定状態を表わす動詞のようである。

次に「接触する」について考察してみる。

(109) 彼の車と太郎の車が接触した。

(110) あの人と接触することだけはさけない。

「接触する」という語は、接触面が狭く、「接触した」両者に被害のある場合が多いようだ。

## 2.4. 構文

構文について考察してみることとする。

### 2.4.1. AがBに～する。

(111) ふるえる手が、外とうにさわった。

(112) 彼の手が、彼女の肩にふれた。

(113) 家が、大通りに接している。

(114) 太郎の車が、次郎の自転車に接触した。

AとBを交換しても、文章としては成り立つが、内容は、同じではない。

### 2.4.2 AがBと～する。

(115) ふるえる手が、外とうとさわった。

(116) 彼の手が、彼女の肩とふれた。

(117) 家が、大通りと接している。

(118) 太郎の車が、次郎の自転車と接触した。

AとBを交換しても、文章としては成り立つが、内容は、同じではない。

### 2.4.3. AでBに～する。

(119) ふるえる手で 外とうに さわった。

(120) 手で 彼女の肩に ふれた。

(121) 太郎の車で 次郎の自転車に 接触した。

「AでBに～する。」という構文に「接する」は使えない。

### 2.4.4. AにBを～させる。

(122) ふるえる手に 外とうを さわらせる。

(123) 彼女に 肩を ふれさせる。

(124) 太郎の車に 次郎の自転車を 接触させる。

「AにBを～させる。」という構文に「接する」は使えない。

### 2.5. 他動詞と自動詞

「さわる」は、原則として自動詞である。他動詞に用いられた例としては、泉鏡花の『高野聖』に

(125) 手を さわるさえ 暑苦しい……という一例のみある。

「ふれる」も、やはり自動詞であるが、これも他動詞として用いられた例としては、三島由紀夫の『朝騒』に

(126) 初江は、そっと写真に 手をふれて 男に返した。  
の例がある。この他に数例ある。(『動詞の意味用法の記述的研究』より)

「接する」、「接触する」は、自他両方に用いられる可能性のある漢語サ変動詞である。

### 3. まとめ

最後に、この小論文の考察をまとめてみる。

「**触れる**」——人間(人体)を中心にして接触という動作をとらえている。手による接触が中心となるようだ。接触のスピード感があり、接触面が広く、接触時間が持続的であり、意志性がある。日常語的である。

「**ぶれる**」——物理的・客観的に接触という動作をとらえている。使用範囲が広い。接触のスピード感があまりなく、接触面の広さは問題とならず、接触時間は瞬間的であり、意志性のあるときとないときの両方がある。やや文語的である。

「**接する**」——接触という動作より、接近あるいは接触したままの静止した状態を示す。文章語である。

「**接触する**」——接触面が狭く、接触した両者に被害がある場合が多い。文章語である。

#### 参考文献

国立国語研究所 『分類語彙表』 1964.7 3版 秀英出版

国立国語研究所 『動詞の意味用法の記述的研究』 1972.3 秀英出版

新村出 『広辞苑』 1969.5 岩波書店

徳川宗賢・宮島達夫 『類義語辞典』 1974.9 7版 東京堂

日本大辞典刊行会 『日本国語大辞典』 1975.9・1974.5 小学館

柴田武・國廣哲彌・長嶋善郎・山田進 『ことばの意味』

1976.10 平凡社

言語経歴 1955年5月 長野県松本市生。19才まで同地、以後東京。